

正確に描くことの一考察

— 小学生における立方体描写について —

松 永 拓 己

A Study on Drawing Correctly — Cube Depiction in a Schoolchild —

Takumi MATSUNAGA

Abstract

This paper researchs a schoolchild's drawing and feeling. What is "drawing correctly"? Just as Albrecht Durer and Canaletto drew carefully detaied pictures, a schoolchild also tries to draw like a photograph.

I requested cooperation from the Kurokami Elementary School, which is affiliated with the Faculty of Education, Kumamoto University. A first grader, fourth grader, and sixth grader drew the same motif. The time limit was 5 minutes, and the motif was a wooden cube. after drawing, I conducted a questionnaire survey consisting of the following three items: 1) Could you draw as seen? 2) Could you draw well? 3) Do you like drawing?

Result: The schoolchild can draw a picture like a photograph. However, a schoolchild gradually loses confidence and drawing becomes disagreeable. Probably, it will become important to draw not for praise, but to feel the joy of drawing.

Key Words: schoolchild, draw, cube, feeling, reality

I はじめに

「絵画は学であるかどうか (Se la pittura è scienzia o no)」。レオナルド・ダ・ヴィンチが「絵画の書 (libro di pittura)」で掲げた命題である。絵を描くことは難しい。目に見えているものは本当に絵の様態をしているものなのか。絵を描くとき、目で見て、手を使い描き出す。すなわち、視覚で捉え、視覚情報を基に描写用具を用いて形体を表す。デッサンや写生画であれば、どうにかして実物に忠実な再現を試みようとする。

絵を描くことは知性を擁す。視覚でとらえたイメージを出来るだけ正確に描き出そうとする。人は成長の過程でいつの間にか絵を描いており、描けるようになっていく。人は発達段階に応じた絵を描く。

本論では木製の立方体を描くことで発達段階に応じた描写の様子を把握し、絵画表現の見て描くことについて探究する。今回は調査対象として、熊本大学教育学部の協力校である熊本市立黒髪小学校の協力のもと小学生を対象とするものである。

II 描写について

II-1 正確な描写について

モチーフを見て描く場合、我々は、モチーフと一定の距離を保ち、モチーフ全体を観察し、必要な線を見出し、各部分との比例（プロポーション）を考えながら線の位置を決めていく。必要な線は各々の判断に委ねられ、各自、独特の線の選び方、線の太さ、線の運び方を行う。デッサンの練習を積んだ者は、一般的に正しいとされる線の運び方、濃淡やハッチングによる明暗の表現、細部の描き込みを行う。遠近法、短縮法、ハッチング、ぼかし等様々な絵画技法を駆使する。

良い作品と、出来の悪い作品が生まれ、作品を見たものは感想を抱き、沈黙下においてすら評価を行っている。

描く力は成長と共に発達段階に応じて身につくといわれる。年齢とともにある程度までは上手くなる。様々な学習環境下において視覚影響を受ける現代の子どもたちにとって、見よう見まねや、図画工作や美術の授業等により成長が促される。

果たしてどのような作品が良い作品であるかとい

う根本的な問題はあるが、ここでは良い作品ということではなく、正確な描写である作品と一般的にいわれる作品について扱う。

正確な描写の作品とはなにか。この定義付けも難解であり様々に解釈がありうるが、ここでは以下のように仮定した。

- 遠近法に則る。(perspective)
- 短縮法に則る。(foreshortening)

以上の要点をおさえ、写真のように描いたものを正確に描いたものと判断する。

図1はアルブレヒト・デューラー（Albrecht Durer 1471-1528年）の《26歳の自画像》の一部である。描くことに執着し、見えるものを描き上げることに全霊を注いだ彼の迫真の作品である。鏡を見ながら描いた顔の描写であるが、ほかしや、影のあいまいさ、タッチ等による描写表現のあいまいさを極限まで無くし、見えるものを正確にすべて描くという気持ちで描いたことが伺える。

図2はカナレット（Canaletto 1697-1768年）の《サン・マルコ広場》である。画面の隅々まで明確に描



図1



図2

かれた作品であり、あたかも写真の様である。画面は広角（魚眼）レンズを通して見たかのような広がりを持ち、広角のパノラマの風景を見ることができ。カナレットはカメラ・オブスクラを持ち歩き、この補助具を用いて描いたといわれている。写真のような正確さと細密描写にこだわりを感じさせる作品である。

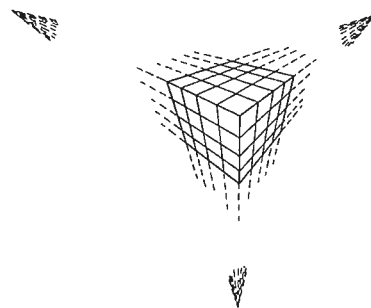
正確さをこれらの作品の中に感じ、それを求めるものとすれば、目に見える世界をどこまでも追跡し、写真のように描きだすことが規範となる。それにより、比較的賛同の得られる作品は誕生する。

Ⅱ-2 木製の立方体の描写について

見て描く場合、前述のとおり、写真のように描くことを正解とした絵画を考える場合、以下の図が参考となる。

図3の三消点透視図法で描かれた立方体は遠近感やプロポーション等の問題を包含した表現になっており、いわゆる形態において正確な表現となっているものである。そして、図4の木製立方体をカメラで撮った写真は同様に一般的に正確な描写の「正解」であり、模範例となるものであろう。

「写実」を行うものは、だれしも、このような絵を描きたいと望み、挑戦する。とくに、小学生から中学生にかけての発達段階（初期写実期、疑写実期）



図序-8D 俯瞰図。三消点透視図

図3 黒田正巳『空間を描く遠近法』p18より

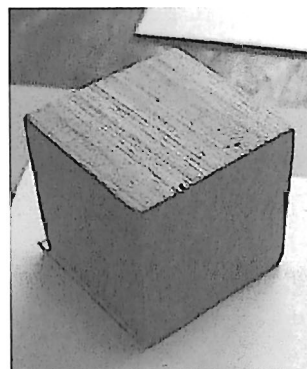


図4 木製立方体の写真

にある人は、写真的写実にあこがれとそこに正解を求める。

Ⅲ 小学生の描写力調査

Ⅲ-1 黒髪小学校での立方体描写調査について

平成20年3月、熊本大学教育学部の協力校である、黒髪小学校において小学生の描写実態を調べるために調査を行った。

調査対象は、発達段階を考慮し、1年、4年、6年の3学年を対象とした。以下、実際に調査説明で使用した調査概要の説明文を全文記載する。

目的

小学生の描写する力を調べ、成長にともなう、見る・描く力を研究する。

調査方法

学年別に最長5分間のデッサンを行う。

同質のモチーフを、同質の描画材（鉛筆）で独力で描く。

描いたデッサンを多角的に分析し、描いた構図・大きさ、プロポーション、短縮法・遠近法の有無、明暗表現の有無、細部（ディテール）への着目度、を比較する。

また、作品については、採点評価は行わず、各自が現時点で頑張って描き出した絵柄を比較するものである。（無記名とする）

調査・描写方法

○配布物…木製のキューブ（3センチ角）、B4横の用紙。

○各自準備物…鉛筆、消しゴム

○描写時間…5分間（最長）はやくできた子どもは、終わってもかまわない。

○描写終了後…裏返して3つの質問に答える。（該当する答えに○をつける）

3つの質問アンケート

しつもん

[はい・まあまあ・いいえ]のどれかに○をつけて下さい。

1. 見たとおり、かけましたか。
[はい ・まあまあ ・いいえ]
2. 絵は、うまくできましたか。
[はい ・まあまあ ・いいえ]
3. 絵をかくことは、好きですか。
[はい ・まあまあ ・いいえ]

描写についての注意事項

B4用紙を横置きにし、用紙左上の所定の枠に、木製キューブを配置する。描写はB4用紙の中央部の破線円内に描く。描く大きさは自由とする。（各自描き易い大きさで）

なお、描き終わったら、用紙を裏返して、3つの質問に答える。

本調査においては、各クラス下記のとおりと同じ文章説明にて実施する。

先生よりの発する文言は以下のとおりとし、それ以外の言葉は発しない。

発問「見るとおり、かいてください。」

※質問があった場合の補足説明について（基本的には、発問の指示だけで各自の判断だけで描いてみる。ただし、基本的な内容は補足してもかまわない。指導は行わない。）

質問①「影はかくのですか」

→補足説明①「木製の立方体の下にあるかげはかかないでいいです。物だけかいてください。」

質問②「木目はかくのですか」

→補足説明②「見るとおりにかいてください」

以上のような内容で調査を実施した。実施の様子は下図のような描画態勢で、木製立方体をB4判の描画用紙の左上部指定の位置、指定の角度に置き、よく見て、用紙中央部の円の内部に鉛筆で描く。この用紙の裏面には3つの質問が書かれており、描写終了直後にアンケートに答えるものとした。なお、本調査にあたっては、事前に黒髪小学校石井祐治校長と入念な計画を立て、調査方法、文言等について打ち合わせを行った。なお調査対象学年人数は1年

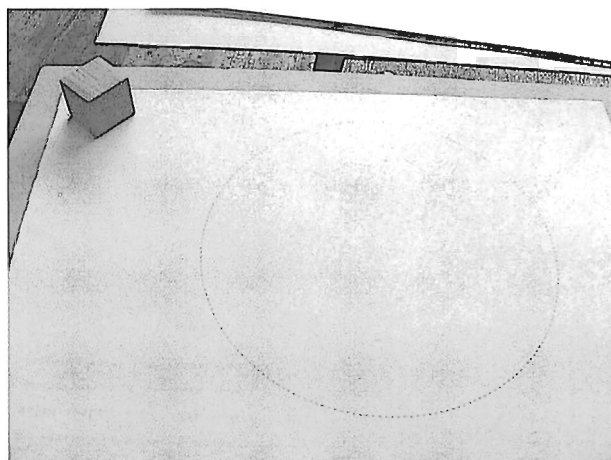


図5 調査の様子再現図

生28名 (N=28), 4年生27名 (N=27), 6年生27名 (N=27) の計82名 (N=82) である。

Ⅲ-2 作品分析

今回の正確な描写の正解例は写真をもとに解析すると図6のような作図になる。

立方体は正方形の6面体であるので各角度は 90° である。しかし、斜め上から見て描く場合、各角には様々な見かけの角度が生じ、その見かけの角度で描かない(描けない)場合には一見歪な立方体が描き上がる。遠近法は必ずしも完璧に三次元を二次元に置き換えるというものではなく、そのように感じ、見える、という歪みを作り出すものである。この歪みは制作者が立方体を見る角度で異なり、また、図6の写真においても、カメラのレンズ収差が生じているため、写真に上描きされた太直線ほど真直ぐな直線は存在せず、写真上はわずかながら歪んだ線が存在している。その写真の持つ歪みの問題をも含め、さらに遠近法や短縮法による歪みを理解し、各見かけの角度で、もしくは、それに近い角度で描かれなくては正確な表現と感じさせることはできない。すなわち、図6のように歪ませることは必要であるが、適切な歪みが必要であり、度を過ぎた歪みは不正確な線となり、その絵は正確に描きあらわした絵と見做されることはない。そして、写真のような表現には図3のような三つの消失点が基本的には存在しているが、図4で見るように、必ずしも形は明快な三消点透視で存在しているものではなく、正確であると思っている写真ですら僅かながら歪みやほやけま

でも存在している。しかし、そのような歪み等に対して我々は寛容で、違和感を感じない。たとえ図2のカナレット作品の広角レンズ的表現も我々は正確であると見做せる。正確さは写真程度でいいのか、それとも写真程度のあいまいさ(あるいは形以外の要素)を含んだvisionがよいのか、正確に描くとはどこまで、何をもって、正確であると断定するのかは各判断者に委ねられるところである。

しかしながら、ここでは前述のとおり透視図や写真に則った正確さを取り上げる為、これらの正確に対する適当な歪みの存在を包含した上で、一般的な常識を踏まえて、上記図6の写真のような表現を正確な表現と見做し、小学生の各作品の特徴的をあげ、分析を行う。

図7は比較的、辺、角度ともほぼ破綻のない立方体の表現である。この様な表現を正確な表現と見做す。(この表現をA型とする。)

図8は立方体の下部が大きく、広がっている。中央部の辺の角度は良さそうであるが、下部への広がり、左右の縦線方向、角度が大きく違っている。ゆえにはっきりと立体感に歪みが見られる。(この表現をB型とする。)

図9は上の辺の交差角度が鋭角すぎる。立体感に歪みは明確であり、さらに、図の最下部に基底線が存在している。基底線(もしくは基底線とおぼしき線)の上に立方体が表されている。よって、側面の形

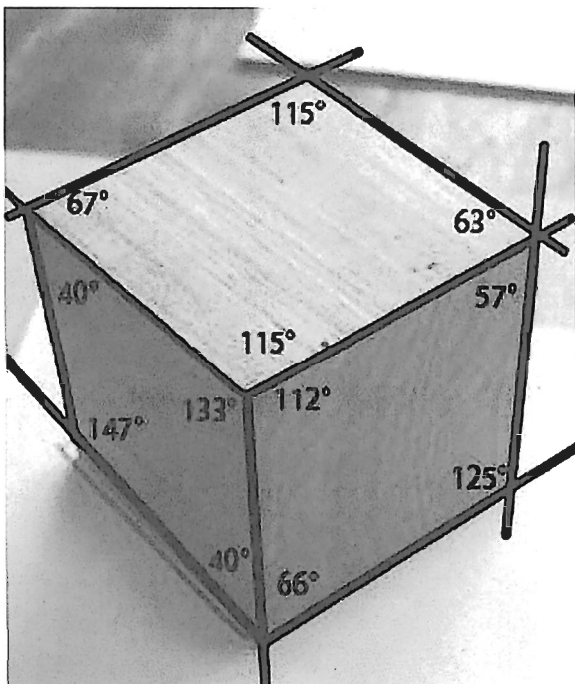


図6 写真による立方体の各角度

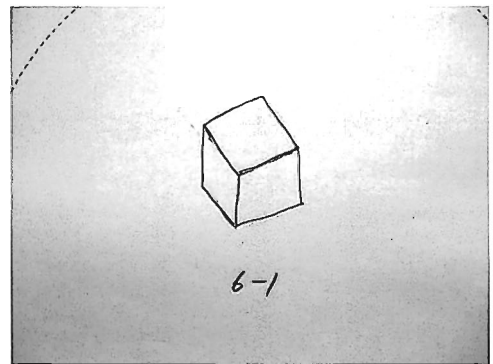


図7

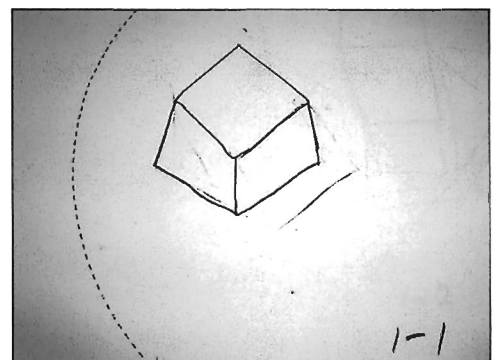


図8

態が、逆遠近法がかかり、概念で描いている部分と、見て描いている部分が入り混じっている。(この表現をC型とする。)

図10は立方体を真正面から捉えた図になり、ただの四角形となっている。しかし、多くの消した線の後から推察するに、はじめは正面ではなく、見える位置から斜の角度をもって捉え、自分の視覚に忠実に描き出そうと努力した姿は見られる。(この表現をD型とする。)

図11は立方体を視覚的に捉えたが、遠近法下の絵画においてはあきらかに不要な線がある。6面体である立方体を、9面で表現している。見たことを考え、必死に描き出そうとしている様子が多くの消した線の様子から伺える。(この表現をE型とする。)

図12は上部が鋭角である。しかし、下部の辺の角

度は水平でなく、わずかながら視覚で捉えた角度を信じて上向きの線に描いている。図8の作品に似た捉え方をしている。しかしながら、この作品の最大の特徴は大きさである。3センチの立方体であるが、B4の用紙枠からはみでる程の大きさに描いており、本論では問わないが正確に描く場合の大きさの把握の個人差を確認できる作品である。また、何度も線を消しながら、視覚と格闘した姿が伺える。

図13は短時間の制作時間の中で木目まで描き表わそうとしている。意欲的な姿勢が伺える。

本分析では、全作品を前示されたA型、B型、C型、D型、E型の表現形態に当てはめて学年別に分類する(表1参照)。各型は細部描写は問わず、形態の捉え方に着目したものである。

※表現形態の特徴のまとめ

A型：写真的遠近感を有する正確な表現

ただし、歪みが小さいものはB(≒A)型として正確な表現と見做す

B型：立体感に大きな歪みが見られる表現

C型：大きな歪みがあり基底線が見られる表現

D型：輪郭線のみで四角形表現

E型：不要(不明)な線が入っている表現

1年生28作品、4年生27作品、6年生27作品の計82作品の分類である。ほぼA型に近い作品(B(≒A)型)も合わせると正確に描いている作品は学年別では次の通りである。(表1参照)

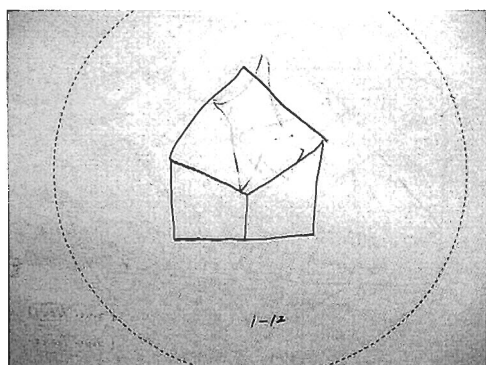


図9

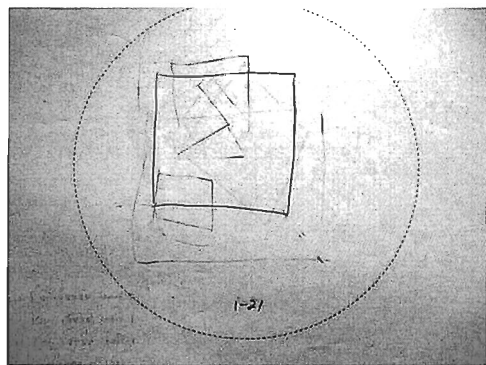


図10

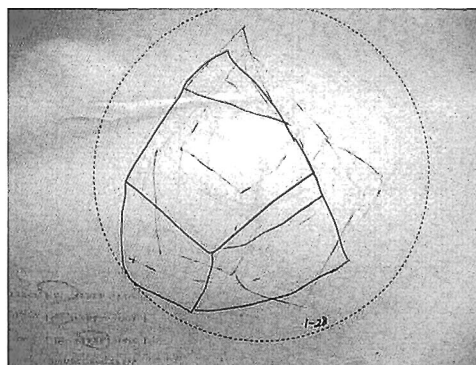


図12

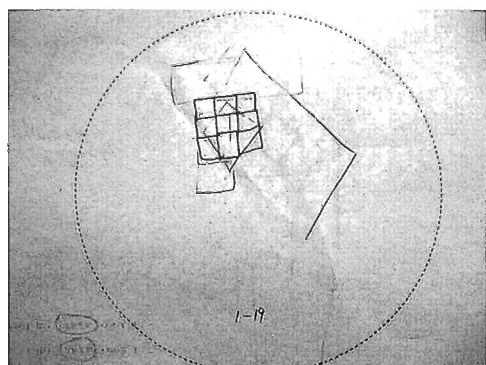


図11

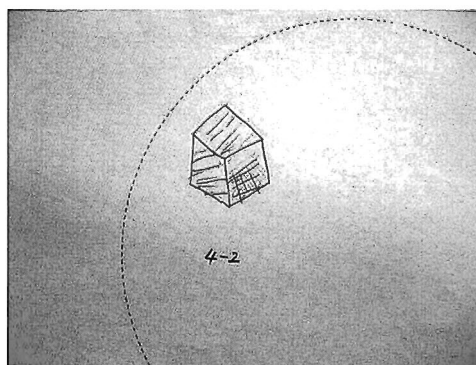


図13

表1

作品表現形態の分類					
1年生		4年生		6年生	
作品番号	型	作品番号	型	作品番号	型
1	1 B	4	1 B	6	1 A
1	2 D	4	2 B(≒A)	6	2 A
1	3 B(≒A)	4	3 B	6	3 A
1	4 C	4	4 B	6	4 A
1	5 D	4	5 A	6	5 A
1	6 D	4	6 B	6	6 A
1	7 C	4	7 B	6	7 A
1	8 C	4	8 C	6	8 C
1	9 B(≒A)	4	9 B(≒A)	6	9 C
1	10 D	4	10 C	6	10 B(≒A)
1	11 C	4	11 C	6	11 A
1	12 C	4	12 C	6	12 B(≒A)
1	13 D	4	13 B	6	13 A
1	14 D	4	14 B(≒A)	6	14 A
1	15 C	4	15 C	6	15 B(≒A)
1	16 B	4	16 B	6	16 A
1	17 C	4	17 B(≒A)	6	17 A
1	18 C	4	18 B(≒A)	6	18 B(≒A)
1	19 E	4	19 B(≒A)	6	19 A
1	20 C	4	20 A	6	20 A
1	21 D	4	21 B	6	21 B(≒A)
1	22 D	4	22 B(≒A)	6	22 A
1	23 D	4	23 E	6	23 B(≒A)
1	24 C	4	24 B	6	24 B(≒A)
1	25 B(≒A)	4	25 B	6	25 B(≒A)
1	26 C	4	26 B	6	26 A
1	27 C	4	27 B(≒A)	6	27 B
1	28 B		※B(≒A)はAに近いBを表す		

1年生…3作品 (10.7%)
 4年生…10作品 (37.0%)
 6年生…24作品 (88.9%)

Ⅲ—3 アンケート分析

本調査において、立方体描写とともに行ったアンケートについて分析する。

アンケートは3項目の質問からなる。

問1は「見たとおり描けたか」である。自分が視覚で捉え、手で描写を行う時、自分が捉えたvisionと同じように描き表すことが出来たかを尋ねる。

問2は「上手く描けたか」である。描く行為における自己の満足感を尋ねる。

問3は「描くことが好きか」である。描く能力や、上手い下手ではなく、描くことの喜びや興味について尋ねる。

結果を数値化すると次表の通りである。

問1、問2、問3とも学年が上がるごとに「はい」の回答数が減少している。(表2表3参照)

Ⅲ—4 作品とアンケート結果よりの分析

作品は前記のとおりA型～E型まで表現形態が異なる。写実はあたかも写真のように描くことを正解としているので、そのように描けた人は完成の満足

表2

1年生				4年生				6年生			
作品番号	問1	問2	問3	作品番号	問1	問2	問3	作品番号	問1	問2	問3
1-1	△	△	○	4-1	△	△	○	6-1	△	△	△
1-2	△	△	○	4-2	△	×	○	6-2	○	△	○
1-3	△	○	○	4-3	△	△	○	6-3	△	△	△
1-4	△	△	○	4-4	△	△	×	6-4	○	△	○
1-5	△	△	△	4-5	○	△	△	6-5	△	△	○
1-6	△	△	○	4-6	○	△	○	6-6	△	△	○
1-7	△	△	○	4-7	△	△	×	6-7	△	△	○
1-8	△	×	○	4-8	△	○	○	6-8	△	△	△
1-9	△	○	○	4-9	○	○	△	6-9	△	×	△
1-10	×	△	△	4-10	△	△	△	6-10	△	△	△
1-11	○	△	○	4-11	△	△	○	6-11	○	○	△
1-12	○	○	△	4-12	△	△	△	6-12	△	△	○
1-13	△	×	○	4-13	△	○	○	6-13	△	△	○
1-14	△	△	○	4-14	○	○	○	6-14	△	×	△
1-15	○	○	○	4-15	○	○	○	6-15	△	△	○
1-16	△	△	○	4-16	×	×	○	6-16	△	△	○
1-17	○	△	○	4-17	△	○	○	6-17	△	△	○
1-18	○	△	○	4-18	△	△	△	6-18	△	×	○
1-19	○	△	△	4-19	△	△	△	6-19	○	○	○
1-20	○	○	○	4-20	△	△	○	6-20	△	△	×
1-21	△	△	○	4-21	△	△	△	6-21	△	△	△
1-22	△	○	△	4-22	△	△	○	6-22	△	△	△
1-23	△	○	未	4-23	×	×	○	6-23	△	×	×
1-24	△	×	○	4-24	△	○	○	6-24	△	×	×
1-25	○	○	○	4-25	△	△	○	6-25	×	△	×
1-26	△	△	△	4-26	○	△	○	6-26	△	△	○
1-27	△	△	△	4-27	○	○	△	6-27	△	△	△
1-28	△	○	○								

※アンケート内容および各記号の説明は下記の通りである。

- 問1 … 見たとおり、かけましたか。
- 問2 … 絵は、うまくできましたか。
- 問3 … 絵をかくことは、好きですか。
- … はい
- △ … まあまあ
- ×
- 未 … 記入されていない(未記入)

表3

1年生	4年生	6年生
問1 ○ 8人 28.60% △ 19人 67.90% × 1人 3.50%	問1 ○ 8人 29.60% △ 17人 63.00% × 2人 7.40%	問1 ○ 4人 14.80% △ 22人 81.50% × 1人 3.70%
問2 ○ 9人 32.00% △ 16人 57.00% × 3人 11.00%	問2 ○ 9人 33.30% △ 15人 55.60% × 3人 11.10%	問2 ○ 2人 7.40% △ 20人 74.10% × 5人 18.50%
問3 ○ 20人 71.00% △ 7人 25.00% × 0人 0.00%	問3 ○ 17人 63.00% △ 8人 29.60% × 2人 7.40%	問3 ○ 14人 51.90% △ 9人 33.30% × 4人 14.80%

感は高いと思われる。作品表現形態とアンケートの回答を比較し分析する。(表4参照)

○問1について

1年生では、AまたはB(≒A)型の作品制作者のうち、「はい」と答えた人は3人中1人である。B、C、D、E型においては、25人中7人が見えるとおりに描けた(「はい」と回答している。

4年生では、AまたはB(≒A)型の作品制作者のうち、「はい」と答えた人は10人中4人である。B、C、D、E型では17人中4人は見えるとおりに描けた(「はい」と回答している。

6年生では、AまたはB(≒A)型の作品制作者のうち、「はい」と答えた人は24人中4人である。B、C型では0人であった。顕著な数値としては、見たとおり描けたという自信を持った回答が6年生では

表4

作品表現形態およびアンケート回答一覧

1年生			4年生			6年生		
作品番号	型	アンケート項目	作品番号	型	アンケート項目	作品番号	型	アンケート項目
		問1 問2 問3			問1 問2 問3			問1 問2 問3
1	1B	△△○	4	1B	△△○	6	1A	△△△
1	2D	△△○	4	2B(≒A)	△×○	6	2A	○△○
1	3B(≒A)	△○	4	3B	△△○	6	3A	△△△
1	4C	△△○	4	4B	△△×	6	4A	○△△
1	5D	△△△	4	5A	○△△	6	5A	△△○
1	6D	△△○	4	6B	△△○	6	6A	△△○
1	7C	△△○	4	7B	△△×	6	7A	△△○
1	8C	△×○	4	8C	△○△	6	8C	△△△
1	9B(≒A)	△○	4	9B(≒A)	○△△	6	9C	△△×
1	10D	×△△	4	10C	△△△	6	10B(≒A)	△△△
1	11C	○△○	4	11C	△△○	6	11A	○△△
1	12C	○△△	4	12C	△△△	6	12B(≒A)	△△○
1	13D	△×○	4	13B	△△○	6	13A	△△○
1	14D	△△○	4	14B(≒A)	○△○	6	14A	△△×
1	15C	○△○	4	15C	○△○	6	15B(≒A)	△△○
1	16B	△△○	4	16B	××○	6	16A	△△○
1	17C	○△○	4	17B(≒A)	△△○	6	17A	△△○
1	18C	○△○	4	18B(≒A)	△△△	6	18B(≒A)	△×○
1	19E	○△△	4	19B(≒A)	○△△	6	19A	○△○
1	20C	○△○	4	20A	△△○	6	20A	△△×
1	21D	△△○	4	21B	△△△	6	21B(≒A)	△△△
1	22D	△△○	4	22B(≒A)	△△○	6	22A	△△△
1	23D	△△○	4	23E	××○	6	23B(≒A)	△××
1	24C	△×○	4	24B	○△○	6	24B(≒A)	△××
1	25B(≒A)	○△○	4	25B	△△○	6	25B(≒A)	×△×
1	26C	△△△	4	26B	○△○	6	26A	△△○
1	27C	△△△	4	27B(≒A)	○△△	6	27B	△△△
1	28B	△△○						

※B(≒A)はAに近いBを表す

くことは好きではないと答えている。全体でも描くことを嫌う比率が学年とともに高まっている。(0%→7.4%→15.0%)中でも、作品番号6-20, 6-23, 6-24, 6-25を描いた人はAまたはB(≒A)型であり、比較的正確に描くことはできるが描くことを嫌っていることが分かった。

全体から、1年生では写真のような描写力でなくとも満足感もあり、描くことを躊躇せず楽しんでいけるが、学年を経ると、写真のような描写力を身につけながらも、満足感や描く喜び、楽しさが薄れている様子が伺える。

Ⅳ 結 論

調査分析により、学年が上がるごとに、描写力は向上し、写真のように正確に描く力は身につけてきていることは解った。しかし、意欲は後退し、描くことを楽しめず、描写に自信を無くしていることも解った。正確に描ける人が、描くことに抵抗感を感じている。それはさらに高みを求める為であろうか、6年生において、描写への自信が揺らぎ、自分は描けないと感じている。下手と思いこんでいる劣等感覚が描写への自信の無さから伺える。

写真のように描くことは唯一の正解であるとの常識がある。本論でもそれに則って調査分析を行っている。常識は知覚すべきであるが、描く喜びを忘れ、正解を求める様態が存在してしまう可能性を含めて、難解な、「描くこと」を理解する事の必要性を感じる。

作品番号6-27, 4-2, 4-13, 4-17, 4-18, 4-22, 4-24, 4-25, 4-26は、制作時間5分間という短時間の中で立方体の木目模様まで描いている。この9人中7人(78%)が描くことが好きであると答えている。そして、この9作品はBまたはB(≒A)の表現形態の作品である。この意欲的な描写と喜びは無関係ではないであろう。

ダ・ヴィンチは、絵画は学であろうかという。視覚には謎があり、三次元を二次元に封じるための知性が要求される。それを実行するための技術が要求される。それは、写真のように描き、正解・完了だけではあるまい。もっと深い知的な喜びも含んでいる。確かに写真的描写に基づく正確さは描く喜びのひとつであり、さらに周囲に褒められたいという気持ちが制作する力を湧かせるが、褒められることのない不正確な作品しか作り出せない場合や、正確に出来ないかもしれないという不安が心を支配した場合、その感情は逆向きに働く。正確に描けるということが制作意欲に必ずしも結びつくものではないよ

1, 4年生の半分(29.6%→14.8%)に激減している。

○問2について

1年生では、AまたはB(≒A)型の作品制作者のうち、「はい」と答えた人は3人中3人全員である。B, C, D, E型では25人中6人が上手に描けた(「はい」と回答し満足感を感じている。

4年生では、AまたはB(≒A)型の作品制作者のうち、「はい」と答えた人は10人中5人である。B, C, E型では17人中4人は上手に描けた(「はい」と満足感を感じている。

6年生では、AまたはB(≒A)型の作品制作者のうち、「はい」と答えた人は24人中2人である。B, C型では0人であった。「上手く描けた」という数値も、問1と同様に6年生で激減している。(33.3%→7.4%)

○問3について

1年生では、AまたはB(≒A)型の作品制作者のうち、「はい」と答えた人は3人中3人全員(100%)である。B, C, D, E型では24人中17人(70.8%)が描くことが好きである(「はい」と答えている。

4年生では、AまたはB(≒A)型の作品制作者のうち、「はい」と答えた人は10人中5人(50%)である。B, C, E型では17人中12人(70.5%)が描くことが好きである(「はい」と答えている。特に、作品番号4-16, 4-23を描いた人は正確に描けず、上手に描けた満足感もなかったが、描くことは好きであると回答している。

6年生では、AまたはB(≒A)型の作品制作者のうち、「はい」と答えた人は24人中14人(58%)である。B, C型では0人であった。すなわち写真のように描ける人の4割程度と描けない3人全員が描

うである。正確・不正確の壁は存在し各自が格闘しなければならぬ。不正確といわれる描写でも黙々と描き出すことの楽しみと共にある者達はある。visionを自分で掴み、捉えた感覚をこの世の中に現出させる一連の絵の仕事をどれほどの興味を湧かせ取り組むかが重要である。それは正確・不正確の壁を乗り越え、正確な描写ですら手に入れる鍵となると思われる。無論、感情を揺り動かす動機がある方が描く喜びも相乗されうる。そういう作品は心を打つと私は思う。感動と共に探究することが大切であろう。感動して描けることは幸せである。

V おわりに

絵を描くことは難しい。しかしながら、教育や周囲環境からの影響などにより、成長とともに写真のように描けるように描写力が備わっていく。E.Hゴンブリッジは明治期のマキノ・ヨシオの逸話やインディアン絵の見方を例として取り上げ、見え方は、習い、慣れるものであることを示唆している。今回の調査は、V.ローエンフェルドの唱える発達段階における、図式期（7～9歳：小学1年生）、初期写実期（9～11歳：小学4年生）、疑写実期（11～13歳：小学6年生）にあたり、小学生を対象に、それぞれの年齢でどのように対象物を把握し、どのような心持ちで絵を描いているのかの調査研究となった。小学生における実態がおぼろげながら把握できた。そ

して絵画の謎と取り組み、目の前の立方体と格闘した5分間の軌跡が作品と化してここに存在していた。

謝 辞

本研究にご協力下さいました熊本市立黒髪小学校の石井祐治校長先生をはじめ、同校の教職員、児童の皆様にご心より感謝申し上げます。

注

出典

(図1) 西村書店 2001 デューラーp60

《26歳の自画像》 アルブレヒト・デューラー 1498, 油彩・板 51×41cm マドリッド, プラド美術館蔵

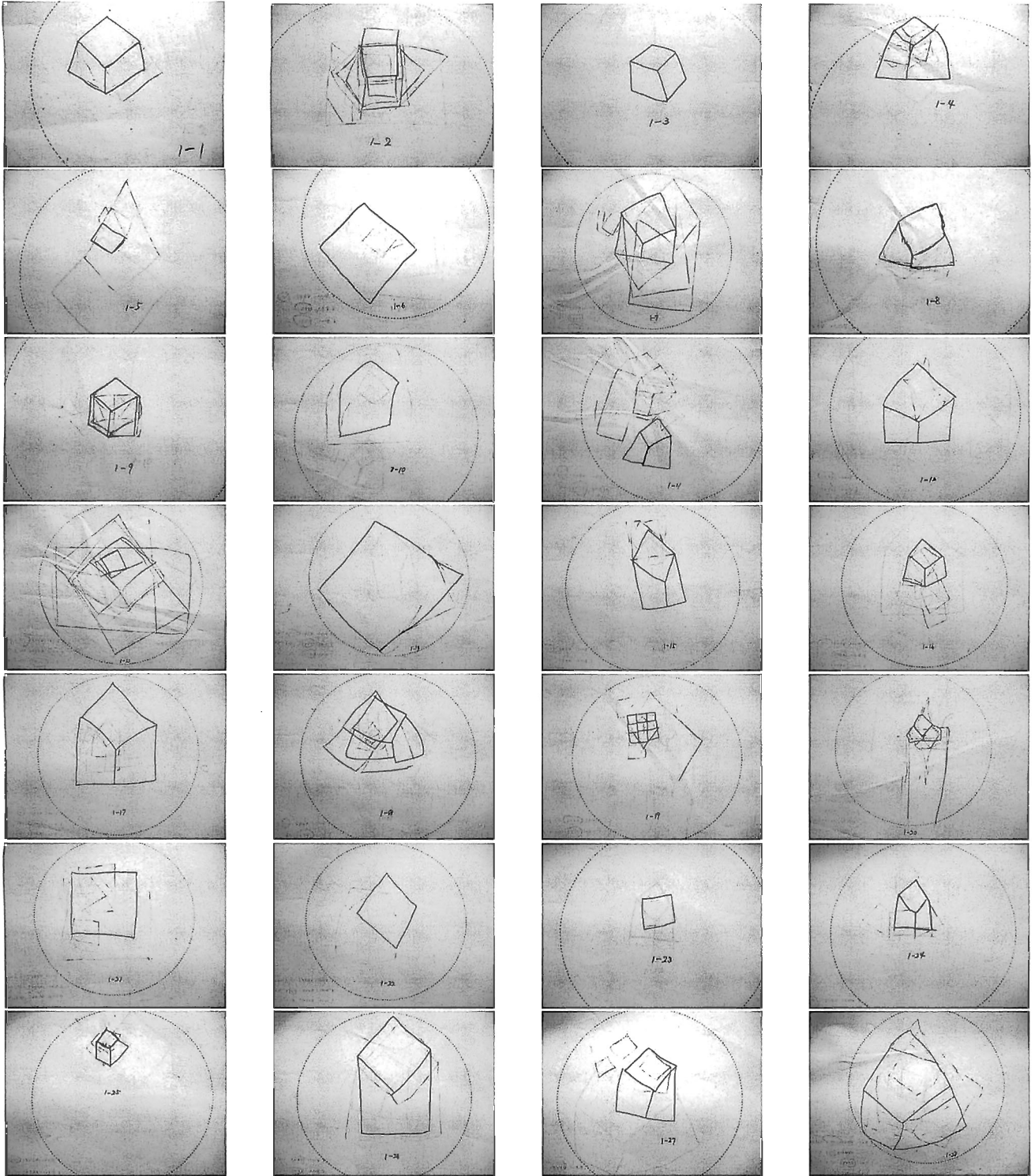
(図2) 西村書店 2001 カナレットp120

《サン・マルコ広場》 カナレット 1750, 油彩・キャンバス 67.3×102cm コネティカット州, ハートフォード, ワーズワース・アセニウム

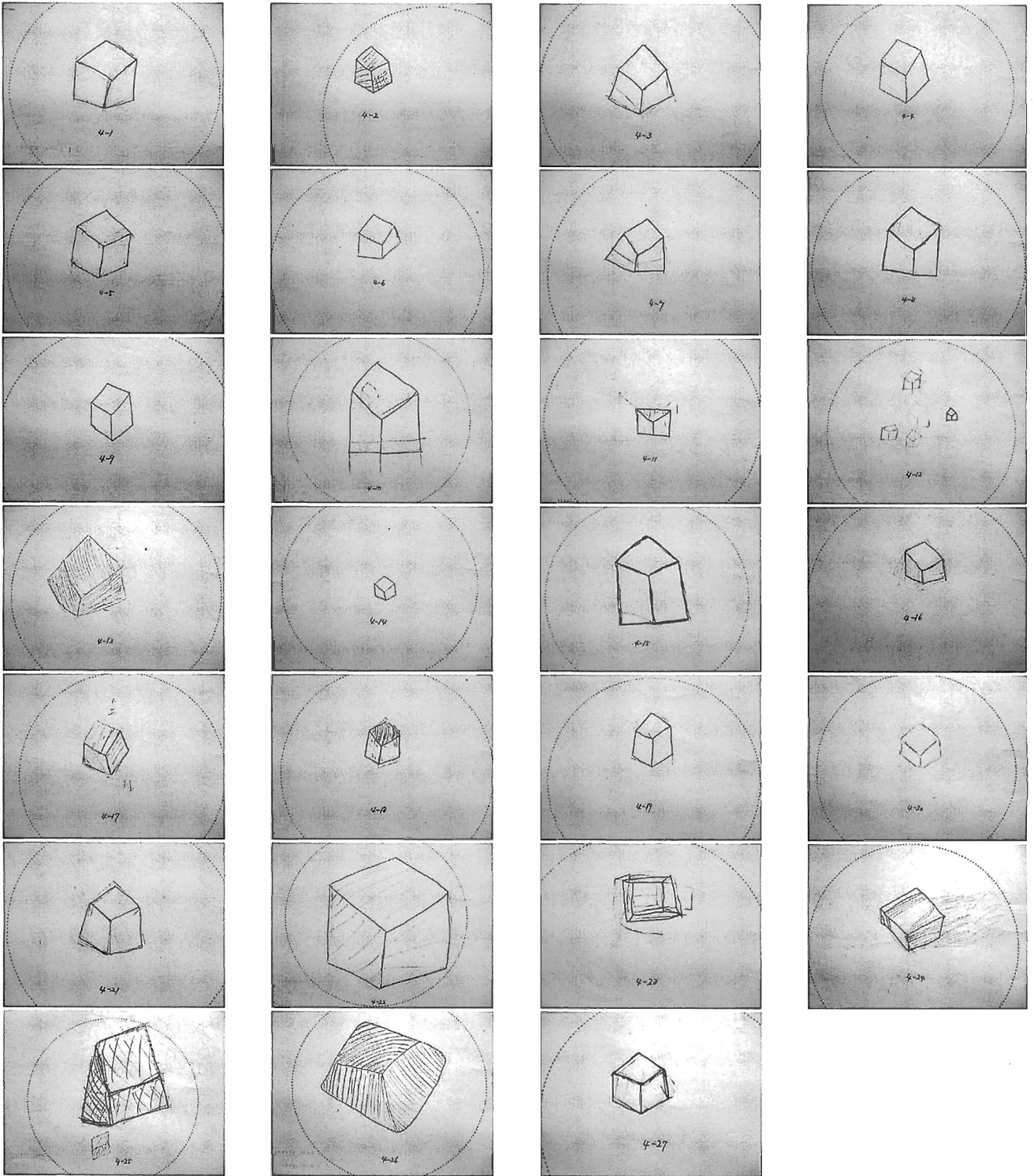
主要参考文献

- ・V.ローエンフェルド(竹内清 堀内敏 武井勝雄 共訳) 『美術による人間形成』, 黎明書房, 第22版 1973
- ・E.H.ゴンブリッジ, 『芸術と幻影』, 岩崎出版社, 1979,
- ・裾分一弘, 『レオナルド・ダ・ヴィンチの「絵画論」攷』, 中央公論美術出版, 1977,

調査作品一覽 (1年生)



調査作品一覧（4年生）



調査作品一覧 (6年生)

